昭和三十一年度に於ける国語学界の展望

音韻・文字

奥村三雄

昭和31年度**音韻・文字**学界といっても、従来とそれ程変った点は認められない。〈各大学紀要はじめ各種刊行物の増加により、論文の数が益〻ふえてきた事、特に、講座類シリーズ物の盛行によって、広い読者層をめざす啓蒙的概説的な記述や、実践的な論（教育や政策に関する）がにぎやかな事〉等は、近年国語学界の一般的傾向であろう。この事は、今まで、展望執筆者が屢〻指摘していられる所であるが、之は、必ずしも、論文をよみつくすのに骨がおれるという事だけを意味するのではないはずである。それはともかくとして、本稿においても、かなり努力はしたつもりであるが、尚且、当然あげるべくしてあげえなかった論文がかなりあると思う。全体としての展望や、各論文に対する紹介批評の妥当ならざる点と共に、御叱正をこう事切である。

音韻

こゝであえて、本年度音韻学界の**概況**をうかゞうなら、〈フォネーム体系・アクセント体系論が一層盛になった事、それに関連して、形態音韻論的な動きがみられる事、音韻史の面では、いつもにまして中古以降がさびしく、専ら上代がにぎわしかった事、それに関連して、字音研究が益〻盛な事、アクセント研究の盛況は例の事として、その史的研究がかなりにぎやかになった事、前述講座類を中心に、言語生活・言語技術という面からの記述が多くなり、それと呼応して、イントネーション等表情音に関する研究が起ってきた事〉等が注目されようか。

フォネーム**体系**論では、ヤコブソンの〈弁別的特徴〉論を紹介批判して、更に厳密な音素論を展開される服部博士、通時論的立場からの見通しを主張される浜田敦氏、音素よりも音節をかなとの関係で考える事が、より日本的な音韻研究だとされる亀井孝氏等の論文が揃って現われ、愈〻活潑である。

服部四郎博士「音韻論に」（国語学26）は、前稿（国語学22）についで更に音素論を詳述された論文、所謂入門講座たるにとゞまらない事勿論である。具体的には、亀井氏の評（国語研究3）に答えるという形をとりつゝ、室町末期及び現在におけるハ行・タ行子音の音韻論的解釈や、例の〈あきま・すきま〉論等が説かれている。特に、ヤコブソンの弁別的特徴を批判して、それと〈目標的特徴〉との関係を説かれる所等は注意をひく。〈タの子音とチの子音を別の音素とする〉氏の立場が、この目標的特徴に示されていよう。軟か音・きしみ音等につきもう少し説明して頂けると有難い。例えば、中世の/Φ/は、何故軟か音と推定されるのか

等について。

浜田敦氏「音韻論的解釈」（国語学24）は、服部博士「音韻論㈠」における音素帰納の作業原則を批判して、更に、〈通時論的観点にたった見通しの原則〉を提示しようとされるもの。例えば、〈かって、シセが/i・/eだった〉という通時的事実の認識を、〈現代語の/i/に同化の原則を適用するか否か〉の決定に適用したいと説かれる。共時的同化と通時的同化との関係等注意すべきであろう。之に対する服部博士の答は翌年度行われる事になった。浜田氏「ガ行子音」（国語国文2）は、従来、東京語等のガ行子音につき、語頭のgと語中尾のŋとの音韻論的対立が認められているが、之は疑問でないかとされるもの。そこには、音韻観察における〈丁寧な発音〉等の問題も論ぜられているが、やはり、前述論文と同様、〈現代語の音素論的解釈に通時論的観点を適用し〉ようとされる所に注意がひかれる。亀井氏「ガ行のかな」と考えあわせたい。

亀井氏「音韻の概念は日本語に有用なりや」（国文学 攷15）は、日本語に音韻（音素（フォネーム））概念は不要でないかとされるもの。国語では、VCの結合なく（註Vは母音、Cは子音）CVの形式のみなのであるから、C・Vの各々は独立の音韻と認め難く、拍（音節）を音韻等価とみなすべきと述べられる。音素よりも音節の方が、より日本語的な音韻単位だという論は、今迄にもなかったとはいえないが、こゝでは、それが、ヤコブソンや服部博士の音素論等を十分理解した上で説かれる所に意義がある。尚、佐久間鼎博士「日本語の発音的特徴」（ことばの講座1）等、日本語の特質論が最近盛であるが、その傾向と考えあわせても興味がある。亀井氏「ガ行のかな」（国語と国文学9）は、前述の立場のもとに、かなと音節の関係をガ行について考察されたもの。〈音声学的立場からすれば、d対nの対立等がg対ŋの対立を支えており、かなの体系からすれば、ga対ŋaの対立は無効である〉所から、〈非合理的な伝承としてのかなが、どこまで音の機能的単位に対応するか〉を問題にしようとされる。音韻論と形態音韻論との関係その他の諸記述も注意すべき。尚、大友信一氏「国語音韻論の問題点」（文芸研究22）は、/g/と/ŋ/・タ行子音・長音……等の諸問題につき、諸説をかゝげつゝ、パイク『フォネミック』論的な立場から、概観的考察を行われたもの。

之等フォネーム論は、後述アクセント体系論と共に、音韻の根本的問題であるだけに、外国人の説をも含めて、他説の理解に十分努力せねばならない事、単なる立場の差や術語の違いによる非生産的な論議がくり返されぬ様努めねばならぬ事、など言をまつまい。

その他、主に外国人の学説に基くものとして、森本佳樹氏「音韻論と文化」（和歌山大学紀要6）・山本治夫氏「Phonèmes 相互の張合いとその構造的安定」（広島大文学部紀要9）等がある。前者は、パイクの音韻論をもとに、音韻論と人間行動様式の研究との関係がのべられている。後者は、フォネーム変化のファクターをフォネーム相互の張合いにありとして、その変化の契機を説かれたもの。西洋諸学者の説がとられている。正名直方氏は、パイク「フォネミック」における機能的非字母記号の邦訳を試みられた。（音声学会報92、以下、この雑誌を会報と略称）

尚この「会報」誌上には、短編ながら、タテトの発音における

音声学的な面を説いた柴田武氏「日本語のタテト」（会報91）・長音の諸問題をのべた佐藤茂氏「日本語の長音と長音表記」（会報90）その他、やはり、音声学的な論がのっている。

一方、音声観察を動物一般に向けたものとして、鈴木孝夫氏「鳥類の音声活動」（言語研究）・大島増次氏「猿類の鳴声とその意味するもの」（会報92）等がある。前者は、鳥類の鳴声から、人間言語音声における記号性の成立過程に見通しをたてようとされる。

表情音的な面では、故高橋正郎氏「語意強調と長音」（国語研究5）があるが、この方面で注目すべきものは、寧ろ、後述講座類の記述・放送等にあろう。高橋氏のは、長音の表現機能を、撥音・促音等と対比しつゝ、ラング的・パロール的の二面から分析考察された論。十数年前の論文らしいが、ナガイ対ナガーイの関係を、ラング・パロールという様な面から考えられる点等注目に値する。やゝ性格は異るが、松岡武氏「文芸表現における語音象徴の問題」（山梨大学芸学部紀要7）は、語音の象徴性を、図形・色彩等との関係から、実験心理学的に捉えようとされたもの。かゝる面の研究が手うすなだけに、将来を期待する。

音韻史では**上代**関係が益々さかんである。先ず泉井久之助博士「上代日本語における母音組織と母音交替」（京大文学部50週年論集）が注目される。各母音相互の結合関係によって、a－o－u・i－i－uという様な結合線を考え、それと母音交替現象とをにらみあわせつゝ、上代母音組織を推論しようとされるもの。古いアルタイ語との関係にも言及される。従来この種の論文では、各現象自体に関する基礎作業に手まどって、なか〳〵こゝまで論じえなかったといえようか。ついで、例の甲乙類問題では、福永静哉氏「先行音節の母音より見るイ列乙類の性格」（女子大国文4）・鶴久氏「上代特殊仮名遣の消滅過程について」（文学研究55）がある。前者は、イ乙類音がどんな母音の音節の後にたちうるかという事を調査し、そのデータが、〈記紀－万葉前期－後期へと、次第に甲乙イ列音が接近してきた〉事を示すとされるもの。後者は、上代文献を精査してみると、ノ甲類の専用文字なく、ノ甲類の語彙もない。ノ甲類はすべてヌからの派生であろうと推論される。何れも、従来から手がけられながら、資料の不足をかこっている問題であるが、尚、研究の余地がないでもなかった。一方では、数の処理法という様な方向へも発展するが、問題の中心はむしろ、池上禎造氏「上代特殊仮名遣の万葉集への適用と解釈」（解釈と鑑賞10）で説かれる如く、用字法としての整理等に移る。尚、この池上氏の論文では、広い視野から、万葉の訓詁その他の諸問題への応用例が示されており、解説論文たるにとゞまらないものがある。

同じ誌上に、頼惟勤氏「万葉仮名と中国の字音史」がある。中国音韻史略 上代篇 ともいうべきもので、**日本漢字音**との関係も処々にふれられている。前年度の「万葉大成」における大野晋氏・頼氏の解説と共に便利なもの。解説を主とする論文においても、現代では、此方側と彼方側などと専門を分担せねばならない点注意すべき。河野六郎氏の「『上代音韻攷』書評」（国語研究5）は、その漢字音論の部分に関する詳しい紹介。有坂博士説以後の中国側の学説もひかれている。最近、一般に書評が充実してきた事は有難い傾向。こゝで、福永静哉氏「日本書紀の清濁表記と中

国原音との関係」（女子大国文3）は、韻書濁音字が書紀で清音にも濁音にも用いられているのは、その原音が有気音の有声音だった為だろうとされる論。慧琳音義・唐五代西北方言等が決め手に用いられる。

次に、上代とは限らぬが、**日本漢字音**の研究として、小松英雄氏「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程」（国語学25）・奥村三雄「日本漢字音の体系」（訓点語と訓点資料6）がある。前者は、博士家訓点資料を中心に、唇内入声促音化の過程を詳しく考察されたもの。促音化し易いもの〻条件分析等注意をひく。表記と音との関係には問題が残る様であるが、その調査の労は多としたい。後者は、呉音・漢音・禅宗唐音・黄檗宋音という四種の日本字音につき、各々代表的な資料の字音表記を広韻・韻鏡等に則って整理し、今様漢呉音図としたもの。従来の漢呉音図・隋唐音図等が、韻鏡図のタテヨコ欄を揃えようとして人工的な字音を示した点に注意し、具体的な資料そのまゝの音図を作ろうと試みた。又、反切の研究として、馬淵和夫氏「反切の方法について（国語研究5）がある。中国及び日本で中古以前に行われていた反切の方法たる〈紐声反・双声反〉の意味を、当時の音韻観に即しつゝ解明しようとされたもの。「文鏡秘府論考」字音学史の記述の一部を訂正しようとされる等、注目すべき所がある。尚、後述浜田敦氏「日本風土記山歌註解」（京大文学部50週年論集）においても、中国近世音の問題が論のきめ手になろう。こうしてみると、漢字音の研究は益〻盛況である。日本漢字音史研究それ自体の意義は別として、之を国語音韻史の方法とするには、中国音韻史の未開拓が障碍となる。今の所、わからないxを二乗する事にもなりかねない。

一方、上代語を中心に**音変化論**もかなりみられる。春日政治博士「国語の母音同化」（語文研究4・5）は、上代語における彼の『起オコス〜尽ツクス』現象をはじめいろんな母音同化現象を六項目に整理考察し、この傾向を国語音韻の一特質とされる。似て非なる現象への考慮もはらわれている。北条忠雄氏「上代国語に存する母音転換の考察」（秋田大学芸学部紀要6）は、上代語における種々の母音変化現象をとりあげ、それに関連する諸問題に言及されたもの。故横山辰次氏「国語における頭韻脱落の現象」（文芸研究23）は、語頭音の脱落を種々の例から考察し、i・u母音が落ち易い等とのべられる。河野亮氏「風土記中の地名起原について」（会報92）も、当時における音変化意識という面に観点がむけられている。之等の中には、必ずしも耳新しくないものもあるが、尚研究の余地がない訳でもあるまい。例えば、共時的変化と通時的変化、一般的変化と語彙的変化等、〈音変化〉の概念をもっとすっきりさせて資料を整理すべきであろう。

上代関係の盛況に対し、**中古以降**は数の上で非常にさびしい。上述の中、字音研究や音変化の論文には、それ〴〵中古以降に関係するものもあるが。中古では、宮嶋弘氏「平安時代中期以前のハ行子音続考」（立命館文学10）があげられる程度。之は、平安中期以前のハ行子音がhだったという説で、国語国文十四2、説林三11とくりかえし述べられているもの。結論は別として、〈同じ在唐記の記述が解釈のし方によって、唇音説の支えにもなり、h音説の根拠にもなる〉という事は興味がある。

中世では、前述浜田敦氏「日本風土記山哥註解」がある。明代

漢字音による中世日本語の音訳資料即ち日本風土記山哥を解読し、そこから当時日本語の音韻状態を考えようとされるもの。〈ハ行の中ヒだけが早く喉音化したのでないか〉の様な記述もあり、有坂博士「国語音韻史の研究」198ページの解釈等を思い起させる。解読作業の労は多とすべき。尚、言語研究30には、大友信一氏「捷解新語にみられる濁音表記」という研究発表要旨がある。又、吾郷寅之進氏「近古に於ける語頭濁音の『候ふ』」（文学5）は、一語の清濁問題を文献学的方向へ導かれるものであるが、音韻史にもつながる。

方言音に関する論はやはり多いが、慣例により方言の項に譲る。たゞこゝでは、金田一春彦氏「音韻分布図」及び解説（東条先生古稀記念会）が、実用的・啓蒙的な意義以上のものをもつ事、上村孝二氏「九州西南部方言における長母音について」（語文研究4・5）平山輝男氏「三宅御蔵両島の言語音について」（会報92）等、注意すべき論文がある事だけをのべておこう。従来から、音韻史的なものは音韻の項に含め、方言的なものは省くという傾向があるが、その理由は方言関係の論文自体にもないとはいえない。

アクセント（以下アと略称）の面で、近来**体系論**がにぎやかな事に関しては、音韻の場合と同様の事がいえよう。尚、ア理論の場合は、参照すべき外人の研究が音韻の場合より少いとか、地域差等が著しく、全国的なア理論をたてるのが難しいとかいう様な事情がある故、体系化を焦らぬ様、又、立場や術語の違いのみに帰する如き非生産的な論議がくりかえされぬ様、特に注意すべきであろう。

先ず、金田一春彦氏「柴田君の『日本語のアクセント体系』をよんで」（国語学26）がある。「国語学21」柴田氏論文への批判という形をとりつゝ、結局、〈上り核〉〈下り核〉二元観よりも〈**タキ**〉一元観の方が優れていると主張されるもの。論の巧みさ明快さは例の事として、特に、〈タキ〉による分布図を考えると、周辺地方へ行くに従いタキの後退する傾向が認められる〉とされるあたり、敬服される。京都方言・嶺娃方言に上り核概念が不要という論等も賛成。唯、全国諸方言を一つのア観で解釈するのは、現在の所無理かもしれない。御自身も認められる様に、語頭の高さの重要な方言もあれば、上昇契機の重要な方言もある。京都方言等は、タキ一元で解釈したとしても、語頭のタキと語内部のタキとに大きな機能の差がある（前者の方が弁別的特徴大）限り、二元観と同じ結果になるであろう。尚、之については、翌年度、和田実氏・柴田武氏の再批判が出る事になっている。益々にぎやかな事であろう。川上蓁氏「アクセント表記の零と無限大」（国語国文3）は、表記法をすっきりさせようとされた実際的な意見。東京語ア表記においては下り契機の位置をモジュール概念で示すのがよい。例えば、ワタシ等所謂無契機型を⑩、助詞ゾ等低く始まるものを⑴で表わそうとされる。モジュール概念は興味がある。尤も、音節概念には、アにも音韻にも通用して便利な点もあるが。尚、⑩が体言接続等で殆ど認められないという事を考えると、『行クサ』は、『②動詞＋不定型助詞』と解釈できるかもしれない。宮内玉子氏「語群とアクセント」（会報91）は、東京語「旅」「足袋」の語中におけるア型を、やはり機械でとらえ

ようとされたもの。柴田氏の論にもこの傾向がみられる。中村通夫氏「いわゆるアクセントの変異現象について」（中央大学紀要7）は未見。

奥村三雄「辞の形態論的性格」（国語国文9）は、〈附属語のア〉型式を整理してみると、京都・東京両方言の間に対応がみられ、それが各語の職能に関係している〉事から、附属語研究にア型式など形態的な面を導入しようとしたもの。形態音韻論的なねらい。

地域差に重点をおいた研究では、やはり、平山輝男氏のお仕事がめだつ。本年度も、「全日本音調分布図」その解説（東条先生古稀記念会）・「能登方言における東京語式音調について」（国学院雑誌1）・「日本語音調の二面性」（同誌7）等がある。「分布図」は、結果的には従来のものと大差ないが、〈型式上・系譜上・型の明瞭さ〉という三つの立場から、全国ア分布の姿を示そうとされる点注目される。「能登方言」の論文は、鹿島郡及び輪島市の或部落にある孤立的乙種アについて記述し、之は周囲の甲種アから変化したものらしいと推論されるもの。その推論の方向は、金田一春彦氏の説（文学二十二8）と大体同様であるが、平山氏が、十余年前にこの地方のアを調べ、「アクセント論叢」にも一編をものしていられる点注意すべき。「一二面性」の論文は、全国アを型の明瞭さという点で分類し、型区別の失われてゆく傾向性を説かれたもの。〈同じ一型アにも、型の崩壊による場合と型の統合による場合とがある〉という記述等は興味深いだけに、もう少し説明してほしい。その他、平山氏「富山岐阜両方言の音調境界線と近隣方言の音調体系」（近畿方言叢書4）広戸惇氏「岡山県におけるアクセントの分布」（島根大学論集6）をはじめ、方言アの研究は益〻盛況であるが、方言音の場合と同様、方言の項に譲る。

アの**史的**研究は例年よりもにぎやかである。もと〳〵文献資料が少く、而も取扱いが難しいとか、表記の解釈がめんどうだとかいう様な事情があるだけに、この傾向は特に注意すべきであろう。先覚金田一春彦氏等の業績に負う所が多い事はいう迄もないが。先ず、和田実氏「伊勢本系古事記の声点」（国学院雑誌7）は、伊勢本系古事記写本の声点を整理し、いろんな内部徴証から、之を御巫本私記等と同様、名義抄式ア体系に準ずるものと推論される。「国語学」22輯18ページ金田一氏の表の、①②何れかに加えられるべき資料。岡田尚子氏「日本書紀古写本のアクセントと古今訓点抄のアクセント」（女子大文学8・9）は、75ページに亙る詳細な報告論文で、その考察の結果が、『紀における〈去〉は訓点抄で〈上〉・紀で〈上〉型の助詞は訓点抄で従属型』等と8項目にまとめられている。結果自体は必ずしも耳新しくない所もあるが、労は多とすべき。南不二男氏「名義抄時代の京都方言における二字四段動詞のアクセント」（国語学27）においては、名義抄等の記載に、現在高知方言等を考えあわせて、院政期京都語二字四段動詞各活用形のアを再構しようとされる。下上乙型（『読ム』の終止形）の推定など興味深いが、資料が限られるだけに問題も残されよう。例えば『読ム』の未然形(1)と已然形とに、平上甲・平上乙の対立を考えられる点等。一方、声明資料関係では、桜井茂治氏「近畿アクセント下上型名詞甲乙類の別発生の再検討」（国語研究5）「仏遺教経の旋律に反映した国語のア

クセント」（国語学27）があって注目される。前者は、四座講式等声明資料の記述を中心に下上型甲乙の別は鎌倉初期に現われたと推論されるもの。区別発生の理由については、〈もと〉〈あった第二音節の僅かな違いが、後続助詞に影響した〉為と説かれる。後者は、仏遺教経譜本の曲節には、名義抄式ア体系をそのまま反映しているものと、伝誦の途中で曲節変化を起したものとがあるとされる。各々声調変化の説明等注意をひく所もあるが、今の所、この種の資料の実態究明が問題の重点であろう。将来を期待する。尚、国語研究所でも、岩淵・広浜・市川の諸氏によって、声明資料の研究が行われている様子。その他、吉田金彦氏編「図書寮本類聚名義抄和訓索引」（編者発行）には、声点がそのまゝついている。

こゝで、**イントネーション**（以下イントと略称）及びそれに準ずる現象の研究は見逃せない。先ず、川上蓁氏には、本年度、「文頭のイントネーション」（国語学25）「昇降調の三種」（会報92）があって注目される。前者は東京語を中心として文頭イントの提唱。〈従来、文末イントのみがとりあげられているが、文頭や全文のイントについても考えるべき〉とされるのは肯ける。〈京阪方言等でも同様の事が考えられよう〉とするのは、例の京都方言〈スズメ・スズメ・スズメ〉論等にも発展して興味深い。後者は、文末・句末・全文各音調における昇降調について述べられたもの。それらは、「国語学5」金田一氏の論文ではどう位置づけられるか等と考えさせられる。この他、大西雅雄博士「商業放送の音声調査」（会報92）にも、イントの分類が行われているし、神島武彦氏「日本語表現法上の文末助詞ノ（ノー）」（国文学攷15）でも、文末助詞の抑揚（藤原博士に似たとらえ方）が六つの型に分けて観察されており、各々注意をひく。かゝるイントの研究は未開拓であるだけに、将来に期待する所多いが、先ず、ラング・パロールという様な観点からイントの性格をもう少しはっきりさせてほしいものである。尚、ア。研究等は別として、イントの面では外国の研究に学ぶべき点が多かろうと思われるが、そんな意味から、山内不二吉氏「限定詞＋名詞よりなる句の意味強勢と音調について」（成城文芸8）はじめ、会報にのせられた外国語のイント論も注目すべきである。

より広い読手を対象とする講座類の盛行については前にもふれたが、その中に、音関係の記述もかなりみられる。その概説的啓蒙的意義は別として、**発声法・発音技術**等、実際的な面への意義は、この面での論文が殆どないだけに見逃せない。例えば、「ことばの講座（創元社）8」には、田口卯三郎氏「発声と発音」、徳川夢声氏「声の表情」がある。前者は、各音声の性格を実験音響学的にとらえ、そこから発音発声の技術を説かれたもの。後者は、発声発言のコツを表情表現という点から気軽にのべられたもの。アクセントはじめ、撥促音、ラ行音等「日本語の発音的特徴」をのべた佐久間博士の記述（同講座1）等と共に興味がある。又、田代晃二氏「標準語アクセント独習三十日」（創元社）は、前著「教本」と同様実用的意義をもつ。又、NHK国語講座には、その様な面から注目すべきものが数あった。柴田武氏「発音と発声」（1―3月）・林義雄氏「発声法」（4―5月）・田中千禾夫氏「発声の仕方」（6―7月）・颯田琴次氏「リズムとイントネーション」・（8―9月）・平山輝男氏「アクセントの問

題」（10―11月）・木下順二氏「日本語について――発音の問題を中心に――」（12月）等。こゝで一々紹介するいとまはないが、何れ活字化されるものであろう。

文字

学としての**文字論**は、確かに従来から説かれる如く未開拓である。さしあたって本稿においても、〈国語学としての文字論の領域〉をはっきりさせるのに困るというのが実際である。かゝる状態において、近年、文字史研究への具体的方法が示されようとしているのは特に注目すべきであろう。一方、文字や表記法の基礎的研究が、従来からひき続いてじみちに成果をあげている事も見逃せない。例えば、〈上代文献を中心とする漢字用法の研究・点本等によるかな字体の研究・かなづかいの史的研究・現代における表記の実態調査〉等は、本年度もかなり盛だったといえる。又、表記法の実践的国語政策的な論は最近益々にぎやかになりつゝあるが、それらにも、広い意味の文字論のどこかに位置するものが多かろう。学としての体系づけ論や表記意識的な研究等は未だしとしても、尚且、文字論はわりに進んでいるという見方ができるかもしれない。

一般的傾向としての啓蒙的・実践的な記述の増加は前述の如くであるが、この分野では、**国字問題十周年**を迎えて特にそれが著しかったといえる。その中で、佐藤喜代治氏「漢字と国語」（文部省国語シリーズ32）あたりは注目してもよい。概説的記述のうちに漢字と国語との複雑な関係にかなり詳しい分析考察がみられる。国語の意味変化に対する漢字の影響や、所謂あて字現象の分析等は特に興味がひかれる。その他、ことばの講座（創元社）の松坂忠則氏「文字の種類の使い方」・日下部文夫氏「絵から文字へ」、講座日本語（大月書店）の鈴木重幸氏「ことばと文字」、言語生活（1―12）の清水雄二郎氏「漢字講座」等、それ〴〵に有意義なものもあるが、一々説明するいとまはない。又、**A・C・ムーアハウス**「文字の歴史」・シャルルイグーネ「文字」等の飜訳が、各々ねずまさし氏（岩波）・矢島文雄氏（白水社）によってだされた事も注目すべき。前者における〈各国文字能力発達の概要〉等、興味深い記述がかなりみられる。日本と西洋と文字論のあり方が違うかどうかは別としても、もう少しあちらの事情がわかってもよかろう。以上は、学としての文字論の最初にのべるにふさわしくないものかもしれないが、こういう所に、本年度この分野の大きな特徴があるともいえよう。

文字史研究では、やはり、山田俊雄氏のお仕事が注目される。本年度は、「真字熱田本平家物語の文字史的研究の序」（成城文芸7）がある。具体的には、『無実の罪・かなひく』等の語を表記法の面から考察しつゝ、熱田本平家の性格を考え、そこから発展して文字史研究の立場をのべようとされたもの。継続的な仕事の中間報告というべきもので、全体的な成果が期待される。尤も、〈一作品の表記法用字法その他諸の現象を正確に記述する〉というのは大へんな事であろうが。

一方、基礎的な仕事として、**かな字体**の研究は依然盛である。先ず、遠藤嘉基博士「醍醐寺五重塔の戯書」（国語国文6）は、五重塔天井板かたかな書きの戯書についての考証と解読。結論として、そのかな字体を寺創建当時のものと推論されるが、多くの

資料を駆使してのかな字体考証は常人にまねのできぬ所。解読という仕事の難しさを今更ながら痛感させられる。尚、小編ながら、曾田文雄氏「仮名字体の伝授」（国語国文2）・水田紀久氏「神田本白氏文集仮名字体表補正」（訓点語と訓点資料7）がある。前者は、『ー(ス)』という字体を具体例に、仮名字体伝授の事実を推論されたもの。後者は、中田祝夫氏の字体表を補正しようとされたものである。その他、数ある訓点関係の論文は大ていこの問題にふれているが、それらについては国語史の項に譲る。山岸徳平氏「古文字学」は、基礎知識特集（解釈と鑑賞4）の寄稿であるが、古筆の概説と、それが本文整定上にもつ意義の重要性を説いていられる。

漢字の字体を書誌学的な面へつなぐものとして、神堀忍氏「元暦校本万葉集巻十七巻十八の書写上の異同をめぐって」（万葉19）がある。両巻の筆跡字体の違いは、同一人における書写時の条件差（疲労度、書写態度等）によるものもあろうとされる。

漢字の用法研究となると、先ず、山田忠雄氏「漢数字の書法」（日本大文学部年報）があげられる。漢数字の『四十五』式表記に対する『四五』式表記の実態を詳細に調査考察されたもので、七五ページに及ぶ労作。文献学的な面に関係する所も多かろうが、特に、表記の実用性・便宜性とか謹直性とかについての記述は興味深い。漢字用法研究が中古以降にさびしいだけに、注意をひかれる。

一方、**上代**文献の用字法論はます〳〵にぎやかである。高木市之助氏「用字法対文学論」（語文4）はやゝ一般論めくが、憶良の用字法考察を通して、そこから万葉巻十六白水郎哥の作者を考える手がゝりをえようとされるもの。尚、この方面では、近年、鶴久氏のお仕事が注目される。本年度は、「万葉集における語告謂言の訓」（語文研究45）・「万葉集における者字の用法」（万葉21）がある。前者は、『語告』等の漢字に対応する訓がいろ〳〵ある所から、当時の用字意識・用字法等を考えようとされる論。後者は、『中中者』（万葉216）をナカナカニとよみ、『者』を、『也焉』等と同様不読助字とし、こういう所にこそ、家持の用字意識が具体的につかめようとするもの。具体的には問題も残ろうが、用字意識の追求に意を注がれる所等、興味深い。同じ助字用法として、春日和男氏「也字の訓読考」（文学研究54）・山崎孝雄氏「古事記における者と也とについて」（国学院雑誌5）等がある。前者は、『也』字にナリという訓が意識され実用化されてゆく過程を、訓点資料等の用例から考察されたもの。その他、用字法から訓読へつながる面の研究は数多くあるが、訓詁解釈の項に譲ろう。

やゝ性格は異るが、鈴木一彦氏「漢字への置き換へによる解釈方法をめぐって」（山梨大学芸学部紀要7）も興味をひく。平安末ー江戸に亙る和哥の註釈の中、漢字へのおきかえを解釈の方法としたものにつき考察し、かなと漢字との機能上の差を考えようとされる論。中間報告的なもので、全体的な発表が期待される。

漢字とかなの機能を用法上の関係から考えようとすると、小倉学氏「宣命書について」（国学院雑誌7）の如き形になる。所謂宣命書展開のあとを概観的にたどり、漢文・かな文等との関係を考えつゝ、漢字とかなの機能に論及しようとされたもの。もう少しふみこめそうな点もある。表記法の歴史といえば先ず注目され

るテーマであるが、尚発展性をもつといえよう。一方、浜田敦氏「正書法としての語表記における漢字とかなの問題」（言語生活2）馬淵和夫氏「文字観革命と漢字制限の一方向」（国語3）等実践的な方向の論に、漢字とかなの用法の歴史的な記述が相当認められるが、之については、後述かなづかいの場合と同様の事がいえよう。

同じ表記法でも、**かなづかい**になると、音韻との関係が問題になる。馬淵和夫氏「定家かなづかいと上代特殊かなづかい」（解釈と鑑賞4）では、表題の二者について、〈前者は音韻的な問題、後者はかなづかい的な問題〉という様な性格の差を説き、それが、文献の取扱い方にどんな関係をもつかという事をのべていられる。〈特殊仮名遣と歴史的仮名遣との間に本質的な差はない〉とされる池上禎造氏の論（前出、解釈と鑑賞10）と考えあわせて興味がある。勿論、両氏のいわれる意味は同次元でない故、ことば論議をする必要はないが、とにかく、この様に、音韻に近づいたり、遠ざかったりする所に、かなづかいの本質があるともいえよう。馬淵和夫氏「日本霊異記訓釈かなの特殊かなづかいについて」（未定稿2）・常盤井猷暦氏「霊異記訓註の特殊仮名遣」（学習院大学文学会誌1）等は、甲乙類問題を扱っていても音韻史の項には含め難い。説かれる如く、霊異記における特殊仮名遣の残存が僅かであり、当時の音韻に無関係だったとしても、それが重要な事実である事に変りはない。かゝる調査が表記法という観点から広く行われると有難い。林大氏「日本語の正書法」（ことばの講座1）・岩淵悦太郎氏「正書法としての仮名遣」（言語生活2）等の論文にもかなづかいの歴史的記述がかなり認められるが、実は、このあたりに表記法問題の特色が現われているともいえよう。即ち、表記法等の面では、どんな場合にも歴史性から離れ得ないと考えられる。（敬語問題等なら、わりに、歴史性から離れ得るか）やゝ性格は異るが、森岡健二氏「五十音図の表記法の沿革」（日本文学7）をこゝにあげておこう。音図表記法の変遷を整理考察されたもので、真仮名図とかな図との関係、アワヤ三行の混乱現象等についてもふれられている。

現代における**表記法の実態調査**は益々盛である。国語教育・国語政策等実践的な目的のものが多い事は勿論であるが、しかし、実態報告自体は文字論においても重要である。こゝでは、「言語生活」誌等を中心に主なものを概観するにとゞめたい。先ず、水谷静夫氏「国語辞典はどう変容したか」（言語生活12）は、11種の国語辞典の表記法を調べ、最近の辞典は現代語に適した表記をとる様になったが、表記法の不統一は困るとされる。教科書の表記法として、夏目郁郎氏「検定教科書の文字づかいの実態」（同4）・松田郁三氏「送りがなの新傾向と教科書の実情」（同7）等がある。何れも、標準たるべき教科書でさえ本によって表記法がまち〳〵で困るとされるもの。検定制度や出版社の実情等にもふれられている。「雑誌のかなづかい」（同12）は、雑誌で歴史的かなづかいがどれ位用いられているかという調査報告で、群像44%、小説新潮0%等となっている。楠道隆氏「小説の漢字はどの様によまれているか」（同6）・長谷川敏正氏「中学生がみた街頭の漢字」（同12）は、何れも学生の理解という面を通してみた一般の漢字使用の実態。前者は、新潮社版「潮騒」の漢字が、大学生にもよめないものをかなり含んでいるとされるもの。この

あたりになると、問題は表現者理解者双方にあるのであろうが、氏は、表現者特に出版者に問題をもってゆかれる。後者は、中学生に広告等の漢字を調べさせた結果の報告で、現代的ならざる漢字使用が多いとされるが、之は、勿論、教育的環境という面から問題を表現者側へもってゆかれる。尚、五十嵐斎一氏「仮名文字の縦書きと横書きのよみについての一考察」（信州大学論集7）は興味ある調査である。よみの能率からみると、有意味文字系列では、縦書き・横書きの間に差がなく、平かなが片かなより早い。無意味文字系列では何れも差が認められないとされる。縦書きと横書きとに能率の差がない等というのはやゝ意外な感じもするが、とにかく、調査方法や数の処理法等、尚研究の余地があろう。

終りに、鈴木真喜男氏「30年度国語学界展望」音韻文字の項（国語学25）が、個々の論文にまで親切に紹介批判を行った詳しいものである事、池上禎造氏「31年度国語学界展望」（国語年鑑32年度版）が、簡潔ながら、広い視野にたって学界の動向を重点的にとらえた優れた展望であり、本稿もそれに負う所があった事又、国語年鑑の論文目録が、分類配列の点で、多少、考慮を要する点はあるにせよ、便利なものであり、「文学語学」誌における、各大学紀要類論文の要旨紹介と共に参照すべき点が多い事、等を記しておこう。とにかく、最近、学界展望、書評、論文目録等が充実してきたのは有難い事である。

——岐阜大学講師——

受贈図書雑誌目録

秩父の民俗語　三六・九月
兵庫方言（第4号）　三六・十月
大分県方言の旅（第4巻）　三六・十月　NHK大分放送局
天理大学学報（第8巻第2号）　三六・十二月　天理大学人文学会
徳島大学学芸紀要（人文科学）（第6巻）　三六・十二月　徳島大学
美作短期大学研究紀要（第4号）　三六・十二月　美作短期大学
郷語書誌稿（問題の点を中心としたる）　三七・一月　近畿方言学会
方言論文集（二）　三七・二月　近畿方言学会
三重県方言資料集　三七・二月
徳島大学学芸紀要（教育科学）（第3巻）　三七・二月　徳島大学
天理大学学報（第38巻第3号）　三七・三月　天理大学人文学会
甲南大学論集（第5号）　三七・三月　甲南大学
論究日本文学（第6号）　三七・三月　立命館大学日本文学会
山形大学紀要（第3巻第4号）　三七・三月　山形大学
愛媛国文研究（第6号）　三七・三月　愛媛国語国文学会
治療教育研究集録（第8号）　三七・三月　日本治療教育研究会
人文科学研究（第12輯）　三七・三月　新潟大学
朝鮮学報（第11号）　三七・三月　朝鮮学会
茨城大学文理学部紀要（第7号）　三七・三月　茨城大学
エスペラント（第38巻第4号）　三七・四月　日本エスペラント学会
ローマ字世界（第503号）　三七・四月　日本ローマ字会
立命館文学（第143号）　三七・四月　立命館大学人文科学研究所

（以下八二頁へ続く）